

この物語はイエスが突然誰かに声をかけ、呼ばれた人たちがすぐにすべてを捨ててついて行くのですが、常識的に考えると少し不自然ではないかと思われます。イエスの弟子とはイエスの言葉と行動に触れて、イエスに従うことを自分で決断した人たちだと考える方が自然です。この物語はいささか理想化・パターン化されています。福音書に記されている召命は一般の弟子入りと逆で、先生であるイエスが弟子を選ぶことが特徴です。イエスが弟子を選ぶことは神さまの選びの根拠は人間の側になくという聖書特有の考え方に基づいていると思われます。神さまの選びとは最も弱く、貧しい人を選ぶことによって、全ての人を救おうとすることなのです。

「わたしについて来なさい」とはイエスの後に従い、ついて行くのです。イエスについていくというのは、考え方や生き方を変えることとは違います。考え方や生き方を変えるという時には、私たちはやはり自分の考え方や生き方によって歩もうとしているのです。しかし、求められているのは、そのように自分を見つめることをやめて、イエスを見つめ、イエスが先立ち、導いている道を行って行くことです。彼らは 17 節の「悔い改めよ。天の国は近づいた」というイエスの言葉に答えて回心し、イエスに従ったのです。彼らは「網を捨てて」、あるいは「舟と父親とを残して」従いました。この「捨てて」と「残して」は原文では同じ言葉です。

そこで、ここにはイエスに従うことにおいて捨てるべきものがあり、しかもそれは漁師にとって生活を成り立たせる基本的なものである網や舟を捨て、そして父親すらも捨てるべきものがあるということが語られているのだ、という人がいます。しかし、イエスに従うためには仕事を止めなければならないとか、家族と縁を切らなければならない、とか言われているわけではありません。これは彼らの普通の生活を完全に途絶させることなのです。8:14 に記されていますようにペトロは召命後も自分の家に入出入りしています。そして心に留めなければならないことは、16:24 の言葉、本当に捨てるべきものは、自分の持っている、大事にしている何か、ではなくて、自分自身なのです。自分の思いや願いや考えによって生きていこうとすることを止めて、イエスに従って行くこと、つまり自分を見つめている目を、イエスの方へと向き変えて、イエスについて従って行くことなのです。

ところで、今日の二つの物語に共通して記されている「従った」という単語があります。それは 20 節、22 節、25 節にあり、原文ではいずれも直訳すれば「彼(イエス)に従った」と記されています。つまりこの二つの物語は共に、イエスに従う人々が生まれた、ということ語っているのです。